様式（１０）

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲　保 第　　号 乙　保	氏　　名	笹井　知子
審査委員	主　査　　葉久　真理 副　査　　岩本　里織 副　査　　近藤　和也		

題　　目　診断から初回治療導入期における肺がん患者の不確かさの管理

著　　者　笹井知子，雄西智恵美

2016年5月発行　日本がん看護学会誌　第30巻第1号73～81ページに発表済

要　　旨　がん患者は先行きの見えない不確かさを経験している。本研究では，特に強い不確かさを経験していると指摘されている診断から初回治療導入期にある進行肺がん患者が，どのように不確かさを管理しているのか明らかにすることを目的とした。研究協力者15 名を対象に，質的記述的研究手法を用いて分析した。その結果，コアカテゴリーとして《死ぬかもしれない自己の先行きが混迷する中で，生きる道筋を見出す》が抽出された。進行肺がんの診断を受けた対象者は，【死が迫っているかもしれない肺がんの治療の先行きが読めない】不確かさを認知しつつ，死が迫っているかもしれない自己の存在意味について【自己が存在していく基盤が揺れ動く】ような混迷状態を経験していた。この混迷した不確かさの中で，進行肺がんの命への影響の見方を変えて【死を遠ざけて，まだ生きられると挑戦をする】取り組みを行っていた。同時に治療を受けられる今を良しとして，【がんとつき合いながら生きる甲斐を見出していく】取り組みも行っており，進行肺がんによって死ぬかもしれない混迷状態の中で生きる道筋を見出そうとしていた。一次治療は生存期間を延長すると推奨されるが，組織型によっては 1 年生存率は 30％未満と報告されており，このような先行きの混迷する中で生存することに専心しながら，そこに生きる意味を見出そうとする取り組みは，初期治療導入期の進行肺がん患者の不確かさの管理の特徴と捉えられた。以上の内容は，治療効果や先行きの不確かさのなかでの進行肺がん患者の高い対処能力を示唆するとともに，命の長さと意味ある生に向けた彼らの管理の力を示している。これらは今後のがん患者のQOL向上の支援開発を検討するうえで，その社会的意義は大きく博士の学位授与に値すると判定した。

CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Hiroshima University Institutional Repository